

高齢化とデザインの現在

IFA 9th Global Conference on Ageing 報告

渡辺大輔

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科
後期博士課程

IFA^{*1} (International Federation on Ageing=世界高齢者団体連盟) は、2008年9月4~7日の4日間に渡って、カナダ、モントリオールの会議・展示施設であるPalais des congrès de Montréalにおいてグローバルカンファレンスを開催した。今回で9回目を迎えたカンファレンスのテーマは「Shaping Tomorrow Today (今日、明日を形作る)」である。以下では、会議の様子を紹介する。

■ IFA (世界高齢者団体連盟) とは

IFAは1973年に設立されたNGOであり、世界62カ国から150以上の団体が参加している。ミッションは「年齢を重ねる全ての人々の生活の質を向上させる権利や政策、実践のための情報を誘発し、収集し、分析し、普及させることによって、世界中の高齢者のための積極的な変化をもたらすこと」であり、国連やWHOなどへの積極的な提言を行っている。とくに、経済状態、健康状態、性別、人種、文化などの差異による虐待や差別からの高齢者の権利擁護とそのための方策提言を積極的に行い、またユニバーサルデザインの推進などを行っている。

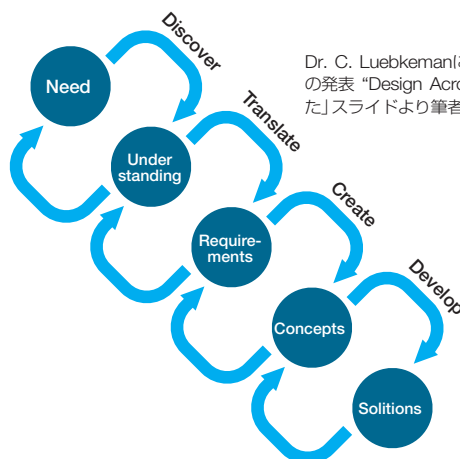
■ 第9回グローバルカンファレンス

このIFAが2、3年に一度のペースで開催している世界会議がIFA Global Conference on Ageingである。その特徴は、世界中の研究者のみならず、政策担当者、実務家、NPO関係

者に参加を呼びかけている点にある。今回の会議も先進国はもとより途上国や後発国に広く参加が呼びかけられ、40カ国以上からの参加者によって研究発表や実践事例報告、政策提言が行われた。会議は、基調講演、記念講義、5回の全体セッションに加え、34のペーパーセッションを含む109の分科会が4日間にわたり開催された。会議は英語とフランス語で行われ、ほとんどのセッションに同時通訳が設置されたことも特徴である。多文化共生を謳うカナダならではの配慮といえる。

また、IFA、モントリオール市、ケベック州政府などが参加するモントリオール市のユニバーサルデザイン化を先導するNGO (Ageing Design Montréal) の主催で、EXPO Ageing & Design Montréal 2008も同時開催された。EXPOでは、ケベック州内で活動している企業や団体の取り組みを中心に、約40組の先進事例の紹介が行われた。とくに、「Age-Friendly City (高齢者にやさしい街づくり) 政策」に関しては、モントリオールのみならず、ポートランド、香港などの各都市独自の取り組みが紹介されていた。

なお、筆者(渡辺)は、ペーパーセッションCountry perspective on ageing issues において共著報告者として参加した。このセッションでは、カナダ、アメリカ、メキシコ、そして日本における高齢化の現状や問題化のされ方が報告され、相違点などが議論された。



Dr. G. Luebkehanによる全体セッション1での発表「Design Across Ages」にて使用されたスライドより筆者が作成

渡辺大輔 *Daisuke Watanabe*

1978年生まれ。慶應義塾大学大学院修士課程修了。
2003年より慶應義塾大学大学院後期博士課程に在籍。
著書に「Human Insecurity in East Asia」United Nations
University Press (共著、印刷中)。

【*1】

<http://www.ifa-fiv.org/>

【*2】

<http://www.ifa2010.org/>

■ デザインとは何か、参加のデザインへ

今回のテーマは「Shaping Tomorrow Today」である。分科会では、地域作りや都市計画などのマクロレベル、高齢者が外に出やすいまちづくりなどのメゾレベル、医療や介護の現場で使用される器具などのマイクロレベルまで、様々な「明日」を形作る試みが紹介され、議論された。また二日目には、ILC米国理事長のバトラー博士による記念講義が行われた。講義では、グローバルに展開する高齢化を踏まえ、感染症予防や肥満対策などの短期的な対策から、福祉と経済の両立、世代間の配分などの長期的課題をいかに解決すべきかが議論された。

様々な議論の中、「デザイン」というコンセプトそのものに関わる議論がなされた点に注目したい。初日の全体セッションでは、とくにこの点が議論された。

そもそも「デザイン」とは、どのように考えるべきものなのか？ 二通りの考え方がある。第一に、design as product (具体的な物としてデザイン) であり、第二に、design as process (プロセスとしてのデザイン) である。前者は物理的で可視的な技術の成果を意味する。対して、後者は、一つの発想であり、方法とツール、技術、認識のセットとしてのデザインである。当然ながら、重要なのは後者である。図にあるように、デザインのプロセスは直線的なものではなく、部分、部分で非線形的であり、そしてユーザーからのフィードバックによって深化する。これまでデザインは一部のデザイ

ナーの専有物であったが、プロセスとしてのデザインという視点はデザインを万人に開くことで市民のエンパワーメントを図り、年齢や性別、文化などが多様なあらゆる市民のニーズに対応する包括的なデザイン inclusive design を可能にする。

このようにデザインの枠を広げることは、物を作るだけでなく、問題の発見や政策立案、評価などのプロセス自体のデザインへも適用されるだろう。実際、各地の「高齢者にやさしい街づくり政策」において、この発想がいかに有効であり、ユーザー目線で多様なニーズに応える可能性を持つか説明されていた。

■ 次回(2010年)はメルボルン

今回の会議は、2010年5月にオーストラリア・メルボルンにおいて開催される*2。テーマは「Climate for Change: Ageing into the Future (変化への環境：高齢化の将来像)」。高齢化だけでなく、地球温暖化という全人類が直面する課題をもかけている。今回議論されたデザインという発想は、高齢化と温暖化という一見関係のない問題を並列させ、その対策を社会デザインとして同時に考える機会を提起している。次は、実践的な解決法の提示が求められている。新たな手法の提示と、関係者のより一層のネットワーク構築を期待したい。



分科会の様子



EXPOの風景(柔らかい食品の展示ブース)